

北信教育事務所だより

令和7年11月25日 発行 第5号

今号では、学校改革支援訪問メニュー「教科等における『探究の学び』の充実」と「インクルーシブな教育の促進」の取組について紹介します。

探究の学び ～願いの充実 ⇄ 対話の充実～ 千曲市立八幡小学校

八幡小学校では、学校教育目標「心ゆたかに たくましく生きる 子ども」の具現に向けて、全校研究テーマ「学ぶ楽しみ・喜びを実感できる子どもとわたしたち～自己・対象・ひと との対話を通して～」を据え、研究を推進しています。秋の校内研究、4年竹組の総合的な学習の時間の一場面を紹介します。

八幡クリーンプロジェクト～八幡をきれいに美しくしよう～

【願い】

地域に落ちていたごみの様子を
全校の皆さんに知ってほしい！



「よりたくさんの人にポスターを見てもらえるようにするには…」
「僕のは、ひらがなが多いから、1年生のところが良い」
「先生、実際に見に行っても良い？」



こっちから行くと
見えないね



1年生の身長ってこれくらい？

Aさん「先生、『はったから見て』って放送しても良い？」
先生「良いけれど、誰にその放送を聞いてもらうの？」
Aさん「全校の皆だから、『ポスターをはったので、見てください』
の方が良いかな」

どちらの方が目立つかな？



子どもたちは常に見る人・聞く人など相手意識をもち、対話を通して友と意見をすり合わせ、よりよい方策を探っていました。学ぶ楽しみを実感しながら、生き生きと活動している様子が見られました。

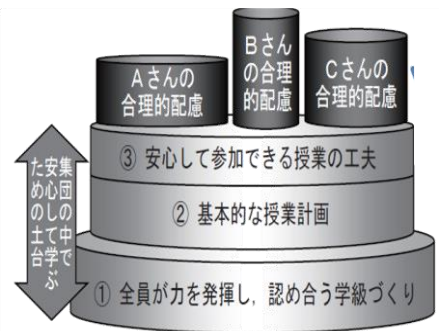
よりよい解決に向けて、必要感のある対話を重ね、主体的・協働的に活動する子どもたちの姿は、自分たちで問いや願いをもってプロジェクトを立ち上げ、課題を設定したことがカギとなっていました。

放送内容を考える場面では、伝えたい相手（対象）に対して言葉の使い方を考える、言葉による見方・考え方を働かせる姿がありました。また、ポスター制作や掲示の場面では、図画工作科の見方・考え方に関わる色や形などの造形的な視点を持ちながら、子どもたちは活動を進めていました。このように探究の学びを実現させていくためには、各教科等における見方・考え方を働かせながら、主体的・対話的で深い学びの視点から授業を考えていくこともポイントの1つになります。

すべての子どもが安心して取り組める授業を目指して 長野市立城山小学校



「算数が苦手と感じる子を一人でも減らせるように丁寧に進めていきたいです。」と1年生担任の倉科先生は語りました。特別な教育的ニーズのある子どもも含め、どの子どもも目を輝かせて力を発揮できる授業の考え方の1つ、「授業のユニバーサルデザイン化」に沿って、研究部会の先生方で授業を構想し、その授業を参観することを通して学び合いました。特別支援教育的ニーズがあるAさんの姿を通して、「授業のユニバーサルデザイン」の視点から1時間の授業を振り返ります。



教育課程編成・学習指導の基本（青本）P.32

Aさんの「困り感」

○見たものの位置や向き、形を理解し、頭の中で整理することに困難さがあり、文字を速く正確に書くことへの負担が大きい。

○体のバランスや動きに関係する感覚の困難さがあり、落ち着いて授業に集中することが難しい。



①全員が力を発揮し、認め合う学級づくり

4+8の計算の仕方を考える場面で、数図ブロックを操作したものの、自信がなさそうに、まわりの様子を見るAさん。隣の席のBさんに声をかけられ、どのようにブロックを操作したかを見合うと、Aさんは笑顔になり、自信をもって自分のやり方を確かめるように何度もブロックを動かしていました。

②基本的な授業計画

倉科先生は、Aさんのペースを尊重しながらも、本時で子どもたちに気づかせたい「10のまとまりをつくる」ことを考える場面では、声色を変えて、トーンを少し上げながら、ゆっくりと間を取り、すべての子どもたちの関心を引きつけるような発問をしていました。

黒板には、具体物と数図ブロックが結びつくように、色分けされたおにぎりの絵を掲示したり、10のまとまりをつくることのよさに気づけるように数図ブロックが10に入るマスや、前時の「7+4」のやり方が書かれた模造紙を貼ったりしています。Aさんだけでなく、算数に苦手意識がある子どもも安心して授業に取り組んでいました。



③安心して参加できる授業の工夫

振り返りを書く場面で、Aさんはがんばったことを「けいさん」と枠いっぱい書き、先生が近くに来ると「できた」とワークシートを見せようとします。倉科先生は「そう、計算をがんばったの」とAさんの思いに寄り添います。書くことが苦手なAさんに、たくさん書くことは求めず、Aさんが伝えたいことは何か、その思いを汲み取ろうとすることが、Aさんの意欲を支えていると感じた場面でした。

温かな学級の雰囲気やわかりやすい授業に加え、「困り感」への理解や配慮が大切です。その環境の中で、特別な教育的ニーズがある子どもも含め、全ての子どもたちは安心して学ぶことができます。「授業のユニバーサルデザイン」の視点から授業をつくり、子どもの姿を通して振り返ってみると新たな気づきがあるかもしれません。



第3回 日々の授業改善研修(10/6開催)

「ぼんやりとしていたものが形になることで、
授業を進めていくときの自信がもてました」

タイトルは第3回日々の授業改善研修(通称:日々研)に初めて参加した先生の感想です。イメージする授業を指導案という目に見える形にすることができたことで、授業を進めていくときの自信につなげることができました。これまで3回実施した日々研に参加した先生方にとって学びの多い時間になっています。



【第3回日々研に初めて参加した先生の感想より】

子どものつぶやきや発見への接し方、捉え方も見えてきて生活科の時間が楽しみになってきました。子どものねがいを大切にしつつ、一緒に楽しみながら、子どもの発見・工夫を見つけられるようになりたいです。(生活・総合的な学習の時間)

日々研には複数回参加してくださる先生もいます。
3回続けて参加してくださったA先生の姿を紹介します。



「国語の授業でのICT活用方法などについて学びたい」という思いをもって1回目に参加したA先生。日頃の悩みを語ったり、他の参加者の実践や悩みを聞いたりした後、指導主事の助言も参考に授業づくり演習に取り組み、次のような感想をもちました。



子どもが主体的に取り組める授業にしたい。

日々の授業実践を重ねながら、A先生の2回目の参加の目的は、「題材をもとに子どもが主体的に授業に取り組めるような工夫を身につけること」でした。2回目を終えたA先生の感想を紹介します。



自分一人だけでは浮かばないアドバイスをもらい、今後の授業づくりにつなげていきたいと思った。子どもが「やりたい!」と思える授業をつくっていきたい。

そして今回の3回目の研修では、参加した他の先生のアドバイスから「自分がその授業を受けて楽しいのか」「これまで受けてきた授業の中で楽しいと感じる授業はどのようなものだったのか」と、授業づくりの視点を広げる姿がありました。そして、子どもの姿を想像しながら教材研究をすることが大切だと考えました。研修を終えた後につづった言葉は、下の通りです。



子どもが「楽しい!」と思うには、まず自分がやって楽しい授業をつくるのが大事だと気づいたので、これからの授業づくりに生かしていきたい。

A先生は、研修を通して、「子どもが主体的に取り組める授業」は「子どもが『やりたい!』と思える授業」であると子どもの姿をイメージしました。さらに、子どもが「やりたい!」と思うのは、「楽しい!」という視点が大切だと気づきました。子どもが「楽しい!」と思える授業をつくるために、教材研究を通して、「自分が楽しい」と感じることは何かと模索し、その楽しさが子どもの「楽しい!」「やりたい!」につながるような授業をつくりたいと自己課題を具体化してきました。

形になっていくものは先生方の自己課題に応じて違いますが、授業づくり演習や悩み相談を通して語り合い、考えたことを基に実践してみる。実践する中で、新たな課題を見つけ、また日々研に参加する。こうした歩みの中で自己課題を更新していく。日々研に複数回参加してくださる先生が多いのは、このようなサイクルを繰り返すことで、「ぼんやりとしていたものが形になる」ことを実感できるからかもしれません。

第4回日々の授業改善研修は12月15日(月)です。次回が今年度最後の日々研になります。是非、ご参加ください。申し込み方法・内容等の詳細は11月中旬に各校へ送信する要項、チラシでご確認ください。

地域とともにある学校の実現に向けて



第2回研究主任研修会では、「地域とともにある学校」の実現に向けて、研究主任の先生方で語り合いました。地域とともに学校づくりに取り組んでいるウェルビーイング実践校TOCO-TON栄村の取組や研究主任の先生方の声を紹介します。



【栄村における主な地域連携の取組】

- ・「みんなで学校を創ろう!」(住民を含む会議)
- ・「みんなで学ぼう」(住民が授業に参加)
- ・「みんなで遊ぼう」(住民と遊びで交流)
- ・地域課題を解決する総合的な学習の時間の実施
- ・住民との交流給食



栄村 発表資料

【研究主任の先生方の声】

- ・地域の方と共に学んだり、学校の在り方を一緒に考えたりしているという発表を聞いて、ワクワクした。
- ・地域の方が子どもと同じ授業を受けていることに驚いた。そうしたことが当たり前になっていると聞き、協働する相手が、子ども同士のみならず、地域の方へも広がり、子どもの学びは一層豊かになると感じた。
- ・地域とつながることが目的ではなく、つながる価値を学校が捉え、吟味し、連携していくことが大切だと感じた。
- ・地域と子どもが、教える・教えられる関係性ではなく、共に学ぶ関係性から始まっていることに感銘を受けた。お互いにとっての楽しさを大事に、地域とのつながりを考えていきたい。
- ・地域との連携はハードルが高いイメージがあったが、地域の方に先生になってもらったり、気軽に地域の方に学校に来ていただいたりすることで、地域と学校とのつながりが生まれ、学校が地域にもっと応援されるようになっていくと感じた。



今、教育は、学校だけで行うものではありません。地域とともに「持続可能な社会の担い手を育成する」方向へとシフトしています。今年度、教育事務所内の組織が再編され、学校教育課と生涯学習課が統合され、『学びの共創課』となりました。今回の研究主任研修会には、これまで生涯学習課に所属し、社会教育を担当する指導主事も参加しました。

社会教育担当指導主事より

グループ討議で「学校の中で、もっと地域と連携した授業を増やしたいと考えているんだけど、地域とつながりが薄いんだよね」と話される先生がいました。研究主任の先生が『地域連携』を視点に学校改革を行おうとしているところに大きな意義があります。地域とともにある学校の実現のために、地域と連携し、教育課程の充実を図ることは、これからの教育において、更に重要になっていきます。

「地域とともにある学校」については、北信教育事務所だよりNo3で、飯山市立秋津小学校の取組も紹介しています。右の二次元コードから、これまでの事務所だよりをご覧ください。



これまでの
事務所だより

人権教育 ～自分の部落史の知識・理解を見直そう～

部落史について正しい知識・理解をもって指導にあたっているのでしょうか。同和教育がはじまったころと現在では、部落史の見方がずいぶん変わってきています。「部落史の見直し O×クイズ」に挑戦し、自分の部落史の見方について見つめ直してみましょう。

「部落史の見直し O×クイズ」に挑戦してみましょう！

<問題>

- 【第1問】 部落差別は、江戸時代のころに始まったとされている。
- 【第2問】 江戸時代、「士農工商」という言葉は一般的に身分の上下を指す言葉として使われていた。
- 【第3問】 江戸時代、被差別部落の人々は、幕府に他の人々よりも下の身分に位置づけられていた。
- 【第4問】 被差別部落の人々は、河原や荒地のような生活条件の悪い所や、村や町の外れに住まわれ、当時の人々の好まない役目を負わされていた。

<ヒント>

【第1問】

部落差別は江戸幕府がつくったものではなく、中世（平安時代～室町時代）の頃が起源であるとされている。かつて日本では、死・出産・自然災害など、非日常的なものを「けがれたもの」と考える風潮があった。そのけがれを清める役割（葬送・死牛馬の処理・行刑など）を担った「キヨメ」と呼ばれた人々に対する「ありがたいけど恐ろしい」という考え方が、次第にけがれを清める者そのものを「けがれたもの」としてとらえ、敬遠・排除するようになったとされている。

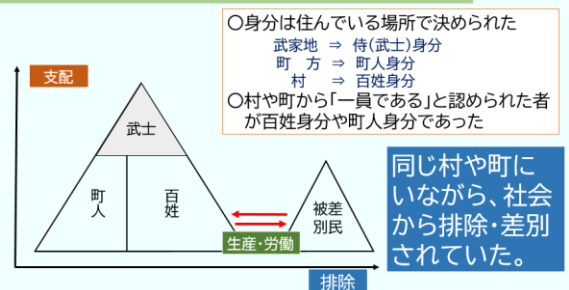
【第2問】

「士農工商」は、古代中国で使われた「いろいろな人たち」という意味の言葉であり、身分上の序列を表す言葉ではなかった。ちなみに、百姓と町人は、主な居住地が農山村であるか町場であるかによって区別されていたと考えられている。

【第3問】

近年の研究では、身分制度の右の二つのピラミッドのように表す考え方がされている。左側のピラミッドには、支配する側の侍（武士）身分と、支配される側の百姓身分・町人身分が含まれる。一方、差別されていた人々は、もう一つのピラミッドとして、離れた位置に描かれる。実際には、差別されていた人は同じ村や町に暮らしていた。しかし、社会の一員として認められることはなく、武士・百姓・町人などが構成する社会の「外」に置かれ、「排除・差別」されていた。

現在考えられている身分制度の考え方



【第4問】

被差別部落の人々は、職業上作業しやすい場所に住むことを自ら選択したと考えられている。皮革業を営む者なら、河原に住む方が死牛馬を解体し、皮を洗う上で都合が良かった。また、被差別部落の人々は、当時の人々の生活に必要不可欠な仕事をしていたといえる。村や町を警備して治安を守ったり、能楽などの諸芸能や寺の庭園づくりを通じて日本の文化の発展に貢献したり、医者や医薬品製造などに従事して医学の発展に功績を残したりした人も多くいた。

《参考》「リーフレット同和問題」（山ノ内町人権政策室・教育委員会）「人権つうしん 34 号」（長野県教育委員会）

「同和問題ミニ講座」（長野県教育委員会）「同和問題について考えよう【教職員用】」（神奈川県教育委員会）

×【図7案】 ×【図8案】 ×【図2案】 ×【図1案】 <正解>

部落史について、詳しく学びたい方は、長野県教育委員会事務局心の支援課のホームページに「小・中学校の学習内容から考える部落差別について」という資料がありますので参考にしてください。

資料の URL www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kokoro/jinken/gakko/documents/010510burakusabetu.pdf

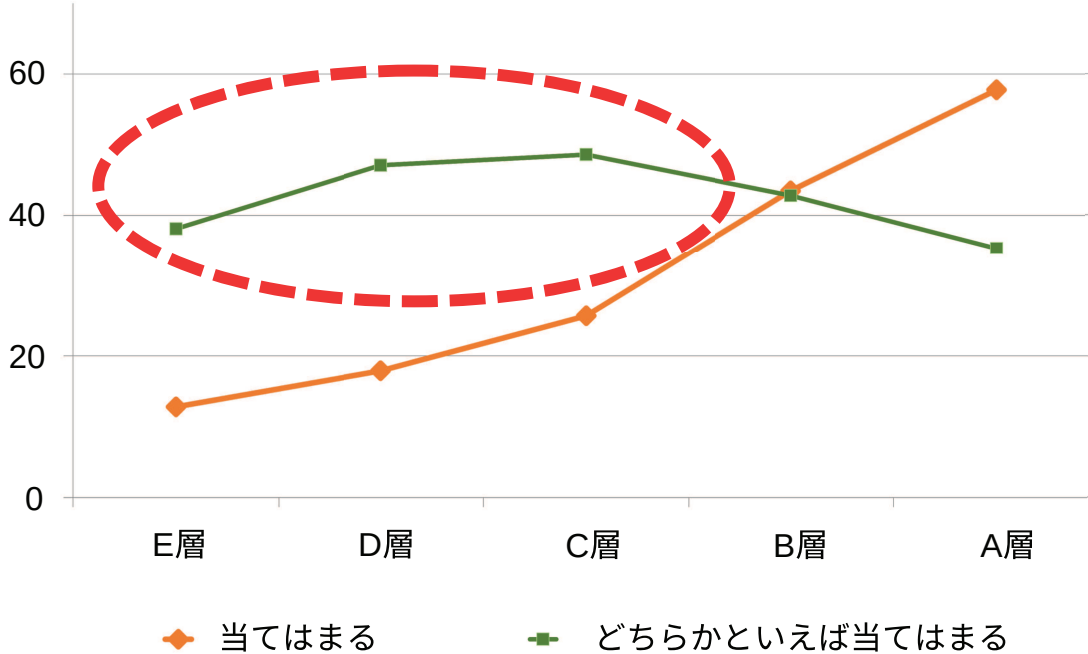
また、長野県教育委員会事務局心の支援課がオンデマンド配信している「同和問題ミニ講座」にも部落史について学べる講座があります。「同和問題ミニ講座」の申し込みは右のQRコードよりお願いします。





長野県の子どもの「よさ」や「可能性」

「数学の授業の内容はよくわかりますか」の回答状況



グラフの見方

中学校数学を受けた生徒を、正答数の多い順に並べて、上位から20%ずつ5つのグループに分けたものがA～E層です。グラフは「数学の授業の内容はよくわかりますか」という質問に対する肯定的回答の割合を示しています。

例えば、正答数の多いA層は「授業の内容はよくわかりますか」の質問に対して、「当てはまる」と回答している生徒が約60%いることが読み取れます。また、正答数が多くなるにつれ、「当てはまる」の回答が増えています。

Q 〇の部分に注目！どんなことが考えられるでしょう？

正答数の多くない、C～E層に「数学の授業の内容はよくわかりますか」の質問に、「どちらかといえば当てはまる」の生徒が、40～50%います。どうしてでしょう？

〇の部分の子供の「よさ」や「可能性」は何でしょう？

- ・「どちらかといえば当てはまる」と回答していることから、授業に一生懸命取り組んでいる？
- ・「どちらかといえば当てはまる」と回答していることから、基本的な計算はできている？

でも、もしかしたら、授業のねらいが曖昧になっているから、その子なりの何となくこんなことができたという思いが、「どちらかといえば当てはまる」につながったかもしれない。

「よさ」や「可能性」を伸ばしましょう！

一生懸命取り組んでいることを認めることは大事。基礎基本の定着も大事。それ以外にも、

- ・教師も、子どもも授業のねらいが明確になるように、板書に位置づけよう。
- ・振り返りの場面で、学びを子ども自身で自覚できるようにしよう。振り返りが単なる感想で終わらないように、「何がわかったか」「何ができるようになったか」「どうしてできるようになったか」を視点を、振り返りができるようにしよう。

お問い合わせ

長野県教育委員会事務局

学びの改革支援課 ☎ 026-235-7434